

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	日西対照研究 : 身体部位名称を用いた表現を資料として
Author(s)	小林, 和世
Citation	ニダバ , 29 : 58 - 67
Issue Date	2000-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00048066
Right	
Relation	



日西対照研究

— 身体部位名称を用いた表現を資料として —

小林 和 世

1. 目的

「口」「手」「鼻」「目」「耳」という五感をつかさどる感覚器官名を含む慣用表現の、スペイン語と日本語の対照研究を試みる。

スペイン語と日本語の慣用表現を採取し、それを分類・分析する。そのことにより、日本語を母語とするスペイン語学習者が、スペイン語の慣用表現を理解するために、少しでも役に立つ提案をおこなうことを最終目的とする。そして、スペイン語を母語とする人と、日本語を母語とする人との間の発想や認識のあり方の違いや共通点を明らかにしていきたい。

資料はスペイン語は、`Diccionario Salamanca de la lengua española`、`Diccionario fraseológico del español moderno`、`Diccionario de uso del español. CD-ROM`、小学館の『西和中辞典』、日本語は、『Super 日本語大辞典 CD-ROM』、『広辞苑 第四版』、『日本国語大辞典』、『CD-ROM 版大辞泉』から抜き出した。

2. 先行研究

堀田(参考文献[7])は、スペイン語の”boca(口)”を含む慣用表現について、日本語話者による理解度を見ることで、スペイン語と日本語の比較対照研究の必要性を述べている。

堀田の論は、愛知県立大学外国語学部スペイン語学科の学生、2年生 20人と3年生以上 9名、計 29名を対象にしたアンケート調査に基づいている。アンケートの内容は、”boca” は「口」として直訳した日本語訳を添えて、一覧表の形で提示する。そして、スペイン語訳とその直訳を見て、意味解釈できたものには○を付け別の言葉で書き換え、全く理解できないものは×を記入するというものである。

アンケートの結果によると、スペイン語の慣用表現において、日本語にもある表現は理解度が高い。例えば、`andaba de boca en boca` (口から口へ歩いていった) という表現がある。これは、「口から口」という表現が日本語にもあり、`andar` (歩く) の本来的な意味「ある場所から別の場所へ移動する」から派生した「伝わる」という比喩的な意味を容易に理解できたためであろう。

堀田氏は、理解度の高いものには、なぜ理解度が高いのかという筆者の考えを述べている。ところが、理解度の低かったものに関しては、調査の結果についてしか述べていない。また、間違っ

た解釈をしたものに関しては、なぜ間違っているのかという筆者自身の考えを述べたり、間違っていた例を挙げているだけである。慣用表現の理解度、つまり、教授・学習するという観点からの研究であるなら、これからの学習者に対するしかるべき提案をはっきり示さなければならないのではないだろうか。

3. 統語論的観点からの分析

3.1. 用例の統語論的観点からの分析

収集した用例を、名詞的慣用表現、形容詞的慣用表現、動詞的慣用表現、副詞的慣用表現の4つに分類する。

名詞的慣用表現とは慣用表現の主要部が名詞であるもの。なおかつ、日本語の場合、助詞をつけて、主題となったり、補足語となったり、判定詞をつけて文の述語となったりするもののことである。形容詞的慣用表現とは慣用表現の主要部が形容詞であるもの。そしてまた、慣用表現自体が、文中で名詞の修飾語として機能したり、述語の働きをしたりするもののことである。動詞的慣用表現とは慣用表現の主要部が動詞であるもの。なおかつ、文全体で述語の働きをするもののことである。副詞的慣用表現とは慣用表現の主要部が副詞であるもの。そしてまた、慣用表現自体が、述語を修飾するもののことである。

日本語とスペイン語のそれぞれの表現の分布を以下に示す。

	名詞的慣用表現	形容詞的慣用表現	動詞的慣用表現	副詞的慣用表現	合計
mano	55	12	213	50	330
ojo	56	0	155	29	240
boca	26	7	88	24	145
nariz	12	3	56	4	75
oreja	16	1	44	2	63
合計	165 (19%)	23 (3%)	556 (65%)	109 (130%)	853

表 1. スペイン語の慣用表現の数の内分け

	名詞的慣用表現	形容詞的慣用表現	動詞的慣用表現	副詞的慣用表現	合計
目	83	28	202	12	325
手	90	25	180	18	313
口	34	25	137	6	202
耳	20	9	75	1	111
鼻	19	7	69	0	95
合計	252 (24%)	94 (9%)	663 (63%)	37 (4%)	1,046

表 2. 日本語の慣用表現の数の内分け

3.2.品詞からの分類

3.2.1.名詞

スペイン語は、名詞には複数形があり定冠詞(女性形: `la , las`、男性形: `el , los`)、不定冠詞(女性形: `una , unas`、男性形: `uno , unos`)が付く。そこで、同じ表現の慣用表現の中で使用されている名詞が、単数形か複数形かで意味に違いがあるかどうかを検証する。冠詞についても、定・不定によって意味に違いが生じるかどうかを調べる。

3.2.1.1.単数形と複数形

a) 単数形と複数形で意味に違いが無いもの

- (1) tender la mano: (手をのばす): (挨拶・和解)手を差し出す;援助する;施し物を求める。
(2) tender las manos a (人): (人に手をのばす):(1)援助する。(2)援助を求めて(人に)頼る。
(1)が`mano`の単数で、(2)が複数である。これらは両者とも、「援助する」という意味を持つ。

b) 単数形と複数形で意味に違いがあるもの

- (3) darse la mano: (手を与え合う): 握手を交わす。
(4) darse las manos: (手が従う): 提携する; 和解(和睦)する。
(3)は、「握手をする」という意味を表す。それに対し、(4)は、「握手をする」の比喩的意味である、「提携する」や、「和解する」という意味を表す。複数形になることにより、比喩的意味を持つことになったのである。

c) 単数形と複数形で、統語的機能の異なるもの

- (5) mala mano: (手の悪い): 不運な、不器用な。
(6) malas manos: (悪い手たち): 不器用な手。
(5)は単数形で形容詞的慣用表現になる。また、(6)は複数形で名詞的慣用表現になる。

3.2.1.2.定冠詞と不定冠詞

a) 定冠詞の付くものと不定冠詞の付くものとで意味に違いが無いもの

- (1) tender la mano: (手をのばす): (挨拶・和解)手を差し出す;援助する;施し物を求める。
(2) tender una mano: (手をのばす): (人)に手を貸す。
(1)が定冠詞の付いている形で、(2)が、不定冠詞の付いている形である。形は異なるが、両方「援助する」という意味を持つ。

b) 定冠詞の付くものと不定冠詞の付くものとで意味が異なるもの

- (7) echar el ojo a (+algo): ((何かに)目を投げる): (何か)に目をつける、もの欲しげに見る。
(8) echar un ojo: (目を投げる): (人や物)を監視するために時々見る。

この二例は、「何かを見る」という共通の意味を保持している。にもかかわらず、一方は「物欲しげに見る」であり、もう一方は、「監視をするために見る」という意味で使われる。

3.2.2.形容詞

形容詞の働きは、人やものの属性である「形」、「ありさま」、「性質」と、人の「感情・感覚」といった状態を表したり、述語となったり、名詞の修飾語となったりすることである。本章では、慣用表現に使用されている形容詞のうちで、本論文で取り扱っている身体部位名称を形容しているものを拾い上げる。

人やものの属性である「形」を表すものの例として、(9) nariz chata:(低い鼻)、が挙げられる。また、「ありさま」を表すものは、(10) mano abierta:(開いた手) や、(11) 「はなっ張りが強い」、「性質」を表すものは、(12) boca chica:(小さい口) や、(13) 「め汚し」、人の「感情・感覚」を表すものは、(14) mirar con buen ojos:(良い目で見ると) や、(15) 「くち惜しい」が、それぞれあげられる。

3.2.3.動詞

スペイン語・日本語とも動詞的慣用表現の数が圧倒的に多い。動詞的慣用表現とは、慣用表現の中心的構成要素が動詞であり、文全体で述語の働きをするものことである。構成要素の中には、動詞が必ず含まれているため、動詞的慣用表現に含まれている動詞を全て抜き出した。

最もよく使われていた動詞は、スペイン語は、「boca(口)」は、「estar(ある、いる)」、「hacer(する)」、「tener(持つ)」であった。「mano(手)」は、「tener(持つ)」と、「dar(与える)」であった。「nariz(鼻)」も、「tener(持つ)」と、「dar(与える)」であった。「ojo(目)」は、「tener(持つ)」であった。「oreja(耳)」は、「estar(ある、いる)」と、「poner(置く)」であった。日本語は、「口」は、「利く」と、「立てる」であった。「手」は、「回る」と、「取る」であった。「鼻」は、「明く」、「欠く」、「突く」、「折る」、「あしらう」、「笑う」、「当てる」、「出す」、「する」、「引く」が二度ずつ使用された。「目」は、「する」であった。「耳」は、「聞く」と、「立つ」であった。

3.2.4.副詞

副詞とは、原則として、述語の修飾語として働くものこと言う。そのため、副詞の場合、副詞が身体部位名称を直接修飾することはない。慣用表現においては、使用されている副詞そのものの数は、それほど多くない。

慣用表現のなかで用いられている副詞を全て抜き出した。スペイン語の慣用表現に使用されている副詞は、五つの器官の表現をすべてあわせて、arriba:(上に)、abajo:(下に)、afuera:(外の)、siempre:(いつも)、fuera:(外に)、atrás:(後ろに)、delante:(後ろに)、debajo:(下に)、muy:(たくさん)、más:(より多く)、más allá (de) :(...より以上)、a la fuerala:(青アザのできた)、alerta:(警戒している)、desmesuradamente:(異常に)、detrás:(後ろ)の15個だけであった。

日本語の慣用表現に用いられている副詞は、「口ずから」と、「手ずから」のみであった。

4.意味論的観点からの分析

4.1. 意義論(semasiology)¹的観点からの分析

4.1.1. 表現が同じで意味も同じもの

スペイン語の慣用表現に対して、日本語でも全く同じ表現同じ意味の慣用表現があるもの。

(16) taparse las orejas: (耳を塞ぐ): 耳を覆う。 --- (17) みみを塞ぐ: 聞こえないようにする。また、強いて聞かないようにする。

スペイン語の慣用表現に対して、日本語では、同じ意味であるが、慣用表現ではない表現が当てはまるものもある。

(18) no quitar los ojos de ... : (~から目を離さない) --- (19) 目を離さない。

4.1.2. 表現が同じで意味が異なっているもの

表現が同じで、意味が異なっているものの例を以下に示す。

(20) revolver los ojos: (目を回す): (2) (怒って) 目をむく。 --- (21) めを回す: 1. (perder el sentido): 気絶する。目を見つめる。2. (estar agobiado de trabajo): 忙しくてあわて惑う。忙しい思いをする。3. (estar con los ojos muy abiertos): ひどく驚く。

スペイン語の例では、いわゆる「目をむく」ことを意味する。それにたいし日本語の「目を回す」が持つ意味は、「気絶する」や、「忙しい思いをする」や、「ひどく驚く」であり、「目をむく」で表されるような「怒る」という感情表現からは程遠い意味ばかりである。

“oreja”と「耳」については、今回このような例は見つけられなかった。

4.2. 名称論(onomasiology)²的観点からの分析

4.2.1. 同じ身体名称を用いた慣用表現

同じ意味を表す、スペイン語の慣用表現と日本語の慣用表現を比較する。慣用表現は、同じ身体名称を用いたものとする。

噂になる

(22) andar en boca de todos

(23) くちに入る 1.

(24) くちに掛かる 1.

(25) くちに上る

(26) くちに乗る 1.

(27) くちの端にかかる

(28) くちの端に上る

¹個々の音形式がどのような意味を担っているかを研究する意味論の一分野。「聞き手」の言語活動を反映する。例えば日本語の「本」に「事物のもと」、「書物」、「細長いものを数える単位」の3つの意味があるというような捕らえ方をする。

²意味あるいは概念がどのような音形式によって命名されているかを研究する意味論の一分野。「話し手」の言語活動を反映する。例えば日本語の場合、{書物}の概念を表す名称に「本」「書物」「書籍」「図書」「巻」「冊」「印刷物」などがあるというような捕らえ方をする。

4.2.2.異なる身体名称を用いた慣用表現

ある意味を別の身体名称を用いて表すものもある。例えば、「顔が効く」だと、スペイン語では、「mano(手)」を用いた表現になるのに対して、日本語では、「口」や「顔」を用いた表現となる。

名が知られていて、何かと無理を通すことができること

(29) tener mano con (+uno)

(30) くちが利く 2.

(31) 顔が効く

4.3.否定表現を用いた慣用表現

慣用表現に、用言が含まれているということは、否定表現も可能であるはずである。しかし、慣用表現は表現上の制約が多いため、安易に肯定文の慣用表現に否定詞を付けるわけにはいかない。ところが、スペイン語には、辞書に挙げてある表現でも、肯定文に否定詞 “no” をつけて、意味的にも否定の意味を表すものがあった。

(32) abrir la boca:(口を開く): 口を開ける(閉じる)、ものを言う。

(33) no abrir la boca:(口を開かない): 口をつぐむ。

また、日本語の慣用表現にも辞書には肯定文の表現しか挙げてないのだが、否定文にしたものも、日常使用しているという例もある。

(34) てに入る: 1.(llegar a las manos): 自分所有となる。2.(darse buena mano en ...): その道に熟達する。そのことになれて、熟練する。3.(hacer a pedir de boca): 自分の思いどおりにする。

(35) 手に入らない

5.五官の持つ機能と派生的意味

五官とは、五感を感じる感覚器官のことである。味覚は口、触覚は手、嗅覚は鼻、視覚は目、聴覚は耳、によって感じられる³。

各感覚器官の基本的な語義を、スペイン語の辞典と日本語の辞典から拾い上げる⁴。スペイン語の辞典は、『西和中辞典』を、日本語の辞典には、『広辞苑』を使用する。

5.1.五官の基本的意義

『西和中辞典』による”boca”の基本的な語義をあげる。

”boca(口)”

1. (人間・動物の)口、口腔。abrir [cerrar] la boca. 口を開ける[閉じる]

2. (飲食・発声器官としての)口。abrir boca. 食欲をそそる。

³味覚を感じる味覚器は、人の場合口腔内にあるとされているのだが、本論文では、味覚器を持つ口を代表として扱うことにする。触覚は、人の場合、皮膚の触小体によって感じられる感覚であるが、本論文では、「手」を触覚器の代表とする。

⁴ 本論文ではページの都合上”boca”―「口」だけを取り上げる。

3. (管・洞穴などの)口、出入り口;開口部、銃口、砲口;[主に複]河口。boca de incendio [de riego] 消火[散水]栓。
4. 破れ目、穴、亀裂。
5. (万力・やっこなどの)挟む部分;(のみなどの)刃先;(金槌の)釘を打つ面の反対側にある釘抜き;(エビ・カニの)鉋。
6. (ぶどう酒の)口当たり、香、ブーケ。de buena boca 香の良い。
7. (扶養すべき)人数。tener seis bocas que alimentar. 6人の扶養家族がいる。
8. ((ラ米))(グアテマラ)(酒の)つまみ。

5.2. 基本的意義からの分析

慣用表現に取り入れられている感覚器官名が、どのような意味を有しているのかを考える。上記に記した基本的意義に当てはまる例を以下に挙げておく。それぞれの用例の先頭についている番号は先に示した基本的意義の番号に対応している。

- 1.(36) enjuagarse la boca:(口を濯ぐ): 口をすすぐ。
- 2.(37) callar la boca:(口を黙る): 口をつぐむ;黙る。
- 3.(38) boca del estómago:(胃の口): ((口))みぞおち。
- 6.(39) de buena boca:(良い口で):(食べ物に)好き嫌いが無い , 香りのよい。
- 7.(40) alimentar (muchas) bocas :((たくさんの)口に)食べ物を与える):(たくさんの)家族を養うこと。

なお、スペイン語の ``boca`` を用いた慣用表現において、基本的意義の 4. 番、5. 番、8. 番の意味を有している ``boca`` を用いた表現は見当たらなかった。

6. 考察

6.1. 統語論的観点からの考察

スペイン語・日本語とも、慣用表現の数の内訳は表 1.、表 2. の通りである。

単数形か複数形かで意味に違いが生じないものは 17 例、定・不定によって意味に違いが無いものは 9 例あった。慣用表現は、語の結びつきが比較的堅いため、使用されている語を入れ替わたりすると、意味が変わってしまったり、意味を成さなくなってしまうことが多い。ところが、ここで挙げられた合計 26 例は、形が違ってても意味は同じである。これらの用例は、比較的柔らかい結びつきの慣用表現であるといえよう。

スペイン語の形容詞を含む慣用表現に、次のようなものがある。「恥ずかしく思う」という意味の、(41) poner a (alguien) las orejas coloradas:(赤い耳にする) である。これは、人が恥ずかしいと感じた時に、耳が赤くなる。その赤くなるという現象を、用いることによって、人が赤くなった原因を述べているのであろう。

動詞については、例えば日本語の慣用表現に使用されている動詞で、「肥える」をとりあげてみる。この動詞は、「口」、「目」、「耳」で使用されている。

「肥える」という動詞は、もともと「からだの肉がふえる。ふとる。」という意味である。これから派生して、「良い悪いの識別力が向上する。」という意味が出来た。そして、「口」や「目」や「耳」と結合し、(42)「くちが肥える」、(43)「めが肥える」、(44)「みみが肥える」のような慣用表現が生まれたのである。「*手が肥える。」や、「*鼻が肥える」といった表現もありそうなものではあるが、「手」と「鼻」とは結合しなかったことが面白い。しかし、「*鼻が肥える」という表現については、もしかすると、「香水業界」や、「芳香剤業界」など、香りに関係の深いところでは使われているかもしれない。

6.2.意味論的観点からの考察

スペイン語と日本語で、表現が同じで意味も同じ慣用表現は、堀田(参考文献[7])でも述べられているように、学習上障害となることは少ない。

しかし、表現形式は同じだが、意味は異なっているものは、誤解を招きやすいであろう。例えば、日本語を母国語としているものが、(45) *boca chica*:((小さい口):1.小食 2.寡黙)と聞いたら、まず日本語に置き換えて、「おちよぼ口」を想像するであろうから、誤解を生じる可能性が大きい。

スペイン語と日本語の対照研究として慣用表現を考える時、問題となりにくいような表現以外のものは、大きく4つに分けることが出来る。ひとつは、ある慣用表現を、それぞれの語に訳した時に、例えば ``boca(口)'' だったら、食べることや、話すこと、味覚など、口に関連した慣用表現で訳されるもの。もうひとつは、全く別の慣用表現で表されるもの。もうひとつは、慣用表現で訳すことが出来ず、説明するしかないものや、単語一つに置き換えることの出来るもの。最後は、諺に訳されるものである。このようなものは学習が困難であるため、教える時にも特に注意して教えた方が良いと思われる。

否定文の慣用表現に関しては、表にまとめると次のようになる。表中のパーセンテージは、``boca"--「口」、``mano"--「手」、``nariz"--「鼻」、``ojo"--「目」、``oreja"--「耳」については、それぞれの身体部位名称を用いた慣用表現の総数に対してのものである。「スペイン語」、「日本語」と書いた部分のパーセンテージは、それぞれの言語の慣用表現の総数に対してのものである。また、括弧内の数字は、(否定表現相当数 / 慣用表現の総数)のことである。

boca	6% (9/145)	口	4% (8/202)
mano	4% (13/330)	手	8% (25/313)
nariz	7% (5/75)	鼻	4% (4/95)
ojo	5% (12/240)	目	5% (16/325)
oreja	0% (0/63)	耳	2% (2/111)
スペイン語	5% (39/853)	日本語	5% (55/1,046)

表 3.スペイン語と日本語の否定表現の数の比較

上記の表を見ると、全体的に見て、否定表現の数は、スペイン語、日本語ともに同じくらいの割合であるようである。

スペイン語の ``oreja(耳)'' の否定表現が一つもないことに注目してみる。次節で取り上げる、「聴覚」に関する表現が多い、「oido(聴覚)'' の使用されている慣用表現を探しても、「聴覚」に関する慣用表現 30 例中、否定表現のものは、(46) no dar crédito a SUS oidos: (耳を疑う)。一例のみであった。このことは、日本とスペインの文化の違いを表しているように思われる。

6.3. 五官の持つ機能と派生的意味に関する考察

五官は、五感を感じる器官のことである。しかし、辞典に挙げられている基本的語義の中には、そのことが明記されていないものもあった。例えば、``boca(口)'' と ``mano(手)'' と「手」では、それぞれ「味覚」と「触覚」に関する記述はなかった。ところが、``boca'' の場合慣用表現の中には、「味覚」に関する表現である、(47) buena boca (1) 他5例が見出された。それに対して、``mano'' では、かろうじて「触覚」に関する表現はあったものの、(48) meter mano a ... 1例のみであった。「手」に関しても同様で、(49) てに当たる 1. 1例のみであった。

また、``oreja(耳)'' と、「耳」に関しては、``oreja'' も基本的語義には「聴覚」に関する記述はない。しかし、(50) aguzar las orejas ほか2例を見付けることが出来た。ところが、日本語の「耳」の使用されている慣用表現のスペイン語訳を見してみる。そうすると、「聴覚」に関する慣用表現については、``oír(聞く)'' や、``escuchar(聴く)'' や、``oido(聴覚)'' で訳されているものがほとんどであった。そのなかでも、``oido(聴覚)'' が一番よく使われていた。つまり、スペイン語は、「聴覚」に関しては、「耳」という単語を用いるより、「聴覚」そのものの単語を用いるのである。

「聴覚」以外の感覚についても、それぞれ、``gusto(味覚)''、``sabor(味覚)''、``tacto(触覚)''、``olfato(嗅覚)''、``vista(視覚)'' という単語がある。この中でも、``vista(視覚)'' は、``ojo(目)'' の、器官としての働きから派生した慣用表現と同じ表現を多く持つ。例の一部を以下に示す。

(51) nublársele a (uno) la vista: (人)の目がかすむ

(52) nublárse/e los ojos a (alguien): (人の目が曇る): (1)人の目が霞む。

ところが、``gusto(味覚)''、``sabor(味覚)''、``tacto(触覚)''、``olfato(嗅覚)'' に関しては、それぞれ 1 例ずつしかなかった。

それぞれの器官は、慣用表現の中でほぼ、五官の意味を肩代わりしている。ところが、``mano(手)'' と、「手」に関しては、各一例ずつしか「触覚」を表す表現がなかった。そのため、「触覚」を感知する器官として ``mano'' と「手」を選択したことは、少々強引であったのであろうかと思われる。ところが、「皮膚」という名称を用いた慣用表現を調べてみても、スペイン語日本語とも、「触覚」に関係する慣用表現は見当たらなかった。おそらく、「触覚」に関しては、「感じる」や、「触る」といったような動詞を用いた表現で表しているであろうと考えられる。

7. 終わりに

本論文では、スペイン語を母語とする人と、日本語を母語とする人との間の発想や認識のあり方の違いや共通点を明らかにし、そのことにより、日本語を母語とするスペイン語学習者が、スぺ

イン語の慣用表現を理解するために、少しでも役に立つ提案をおこなうこと、を最終目標としている。これまで、そのための分析、考察をおこなってきた。

今後、本研究をふまえ考察をすすめていくことにより、さらにスペイン語を母語とする人と、日本語を母語とする人との間の発想や認識のあり方の違いや共通点を明らかにしていくことができることを期待する。その結果として、日本語を母国語とするスペイン語学習者にとって、少しでも役に立つ提案がなされることをのぞむ。

参考文献

- [1]大倉美和子:「日本語とスペイン語の語彙の対照」、『講座日本語と日本語教育 7』, 明治書院, 平成 2 年 (1990), pp27-53.
- [2]亀井孝他編:『言語学大辞典 第6巻 術語編』, 三省堂, 1996.
- [3]国広哲弥:「慣用句論」, 『日本語学』vol.4, 明治書院, 1985, pp.4-14.
- [4]国広哲弥:『意味論の方法』, 大修館書店, 1982.
- [5]坂田雪子:「日本語教育における慣用句」, 『日本語学』vol.4, 明治書院, 1985, pp84-90.
- [6]坂田雪子:「連語・慣用句」, 『講座日本語と日本語教育 7』, 明治書院, 平成 2 年(1990), pp224-252.
- [7]堀田英夫:「日本語話者から見たスペイン語慣用表現 ---boca(口)を含む表現---」, 『愛知県立大学外国語学部紀要言語・文学編』, 第 27 号, 1995, pp363-387.
- [8]宮地裕:「慣用句の周辺 ---連語・ことわざ・複合語---」, 『日本語学』vol.4, 明治書院, 1985, pp62-75.
- [9]Lakoff, G. & Johnson, M.: ``*Metaphores We Live By*`, University of Chicago Press, 1980. 渡部昇一他訳:『レトリックと人生』, 大修館書店, 1986.

使用辞書

- Gutierrez Cuadrado: ``*Diccionario Salamanca de la lengua española*`, Universidad de Salamanca, Madrid, 1996.
- Real Academia Española: ``*Diccionario de la lengua española*`, Espasa-Calpe, Madrid, 1992.
- Varela, Fernando & Kubarth, H: ``*Diccionario fraseológico del español moderno*`, Gredos , Madrid, 1994.
- Moliner, M: ``*Diccionario de uso del español. CD-ROM*`, Gredos , Madrid, 1996.
- 桑名一博:『西和中辞典』, 小学館, 1992.
- 小山能尚:『Super 日本語大辞典 CD-ROM』, 学研, 1998.
- 新村出:『広辞苑 第四版』, 岩波書店, 1991.
- 日本大辞典刊行会:『日本国語大辞典第 6,14,16,18,19 巻』, 小学館, 昭和 56 年.
- 松村明:『CD-ROM 版大辞泉』, 小学館, 1997.
- 宮城昇, エンリケ・コントラレス:『和西辞典』, 白水社, 1979.